

# 幼稚園における保護者成長支援システムの構築に関する研究 —保護者の成長過程を組み入れた教育課程の編成—

内藤知美 (児童学科・准教授)

杉本裕子 (初等教育学科・講師)

## 1. 研究の目的

近年、子育て支援は、国の重要課題であり、保育所での特別保育や幼稚園の預かり保育、子育て支援センターの設立など多くの施策が行われている。しかし、急激に行われたそれらの施策の多くは、子育てに対する保護者の役割軽減への方向性を選び、子どもの成長の基本となる乳幼児期の「保育力」の質的向上を保障するにはいたっていない。

本研究は、育児負担を減らす方向のみではなく、「乳幼児期の空洞化」といわれる子どもの危機的状況を前にして、保育力を高めるために保護者の成長支援を行っていくことが必要であるという立場にたち、保護者の成長支援システムの構築を研究するものである。

実際に保育の場で子どもと共に過ごす時間の多い幼稚園の保護者に焦点をあて、3年保育における子どもの発達過程と連動した保護者の成長支援のあり方について検討する。

## 2. 研究計画 (平成18年度・19年度・20年度)

- (1) ①保育関係文献資料・政府刊行物による日本の保護者支援システムの検討  
②幼稚園における保護者の成長プロセスに関するアンケート調査及び分析  
③幼稚園における保護者の保育参加場面のビデオ分析による検討
- (2) ①当該分野先進研究国であるカナダ・ニュージーランド等の保護者支援システムとの比較検討  
②アンケート対象の保護者に対する継続アンケート調査の実施・分析  
③ビデオ分析対象者に対する保育参加場面の継続検討
- (3) ①アンケート対象の保護者に対する継続アンケート調査の実施・分析  
②ビデオ分析対象者に対する保育参加場面の継続検討  
③研究のまとめ (保護者の成長過程を組み入れた幼稚園教育課程の編成)

## 3. 平成19年度研究成果および今後の課題

平成19年度実施した内容は以下である。

- (1) 「幼稚園における保護者成長支援」のあり方についての概念化。その際、「幼稚園の役割」「保護者成長支援とは何か」の二点に言及。
- (2) 18年度は3歳児保護者へのアンケートを2回実施。19年度も、同一のアンケート対象保護者(4歳児保護者)への継続アンケートを実施(平成20年1月実施予定)し、2年間の変容を分析。また保育参加場面のビデオの分析(平成20年2月実施予定)。
- (3) 幼稚園の各行事後に、行事に関する感想の提出を求め、それを元に、子ども理解や保護者の変容を検討。
- (4) 継続して4歳児の年間指導計画の中に「予想される保護者の姿」「保護者との連携及び留意点」欄を設定し、各学年保育者と保護者との連携、成長支援のあり方を検討。

- (5) 平成18年度の保護者のニーズを汲み取り、平成19年度は①相談の機会として②保護者同士の励ましの場として③異年齢間の保護者の交流、学びあいの場として、「子育てトーク」を企画、実施。

上記の(1)から(5)に関する研究成果は次のようである。

## (1) 幼稚園における「保護者成長支援」のあり方について

### ①成長支援を支える幼稚園の特色

本園では平成13年度からの保育の見直しの経緯において、有効でかつ実質的なコミュニケーションを求めて取り組んだ「保護者との連携」(内藤、2004)への努力が具体的な方策として蓄積されている。それは保護者との i) 経験の共有、ii) 双方向性のコミュニケーションを柱とするものであり、園行事、保育参加ウィーク、定例懇談会、保護者会活動、随時の個別面談などの取り組みに加え、各種通信(クラス便り、幼稚部だよりなど)の発行、連絡帳でのやり取り、登降園時の会話などで、保護者との連携を常に視野に入れて計画・実施してきた(内藤2004)。作成される指導計画などから、個々の保育者に保護者に対する説明責任の意識が根つき、保護者との関わりに必要な技量が増してきていると考えられ、平成19年度現在、上記 i) ii) については、ほぼ日常的に保障される体制が整ったと考えられる。

しかしながら、保護者との連携を土台に幼稚園における保護者の成長支援が展開するためには幼稚園であることの特色と課題として次の二点を押さえておきたい。

- ・ 家庭教育の補完としてスタートした幼稚園は、独立した教育機関としての位置づけが弱く、教育内容についても家庭教育と幼稚園教育の境界が曖昧である。
- ・ 保育に欠ける乳幼児を保育する保育所と比して、預けざるを得ない必然性が低く、そのため、「子どもを他者にゆだねる」意識が生じにくい。

### ②保育力の獲得と幼稚園の役割

子育てには様々な葛藤がつきものであり、その葛藤こそが成長のひとつの契機となり人格の変容をもたらす可能性も大きい。それは常に個別独自の過程をたどる(時間的にも変容の様子についても)ので、ある特定の人格の変容を一概に保護者の成長として捉えることは不適切であり、また定型的なモデルを提示することも疑問である。

そこで保護者の成長支援における幼稚園の役割を、保護者が子どもを養育する経験の充実・深化を支えることとし、保護者が自らのもつ保育力を充実し発揮できる機会を提供することとする。

保育力については以下に整理した。

- ・ 子どもが主体として能動的に実現する成長を支える力(子どもへの肯定的な関心、共感、成長する力への信頼)
- ・ 子どもの判断が所属する社会の文化に適合するものとなるよう価値観形成を導く力
- ・ 自集団の生活にその子どもも成員として参与させ、生活の能力を培う力
- ・ 保護者自身の他の大人との協働力(心情を吐露することができる、内省を伴う理解ができる)

## (2) 継続保護者アンケート(3歳児時点分)から

幼稚園入園前1ヶ月前後は、幼稚園という新しい環境への期待がある反面、「親(主に母親)の手を離れることができるか」「友達ができるかどうか」「友だちとの関係づくりなど集団生活に慣れるかどうか」「排泄の生活習慣が身についていない」「食事に関して好き嫌いがある」などの心配、不安が示された。

入園時のアンケートでも上記の内容と同一な心配、不安が記されている。記述の詳細を見ると、例えば、「私と離れて」「親と離れて」「親離れ」「お母さんっこ」「私から離れなかったので」「母親と離れることがなかった」「親から離れないのではないか」「うまく離れられるのか」「親から離れての集団生活」などの表現が多用され、主に「母親から離れる」ことが心配や不安として焦点化されている。

入園9ヶ月のアンケートでは、「親しい友達関係ができるかどうか」という友だち作りが最も心配や不安なこととしてあげられているが、記述の詳細を検討してみると、「うまく自分の気持ちを伝えられない」「かまえた感じになっている」「自分らしさをおさえ人にあわせてしまう」「馴れ合いになり、仲間はずれをしたりされてしまった時に親である私が気づいてあげられるかどうか不安」「いつも決まったお友だちの話しかしないので色々なお友達とは遊んでいないのかと少し気になる」など、子どもの園生活が見えないことへの不安、子どもに不本意な状況が起こったとしても大人である母親がそこに介入できない不安など、子どもの生活を丸ごと「可視化」したい欲求が読み取れる。そのため、母親が可視化できない園生活の中で起こった変化、例えば自我の形成の中で見られる自己主張や反発、それに伴う言葉の強さは、不安な状況として増幅され意識化されるといえる。

現時点のアンケートから次のことが整理できる。①入園時は、守るべき存在としての子どもへの意識が強いが、育つ存在としての3歳児の能力への信頼は弱い。②入園時は、幼稚園への信頼が確固としてはいないため、不安が生じる。③子どもを「見える」場に留め、可視化したい欲求がみられる。

### (3) 行事の感想から

本園で行われる行事は、現在保護者参加型のものがほとんどである。保育の現場で起こる事柄を理解するには傍観的に観るだけでは限界があり、共感や文脈からの理解を基本の構えとすることが必要である。この点に留意しながら保護者の参加をも組み込んで行事を企画・運営している。ここでは、行事後に提出された保護者の感想を検討する。

3歳児の保護者は4歳・5歳の子どもの姿を見て、「5～6歳でこんな力があるのかと我が子ではないが感動した」など、1年・2年先の成長を見通す機会となっていることへの言及が特徴的である。4歳児の保護者は3歳の子どもの姿を見て「わずか1年前には同じような感じだったのに」とわが子の成長を改めて確認しつつも、5歳児の姿に「あと1年であんなふうになれるのか」と期待と不安が入り混じる心情を吐露している。5歳児の保護者は、どの行事も2回目、3回目の経験となり過去との比較の中で今回の行事についてその運営の仕方や教師たちの工夫また当日に至る指導の過程にも言及していることが特徴的である。

行事の開催当日に至る過程を保護者と共有する努力をすることで、行事が普段の園生活の様子を感じさせ、伝える機会となっていることがわかる。また親子ともに他学年との交流の機会として活用することを通して、子どもの成長が具体的にイメージされるようになる。我が子が集団のダイナミクスの中で元気に活動している姿と同時に、個として認められ肯定的な眼差しが注がれていることもまた保護者を励まし、園に対する信頼感を築いている様子がわかる。

(4) 幼稚園生活二年目（4歳児）の指導計画に現れる「幼稚園が保護者に期待すること」と「保護者が幼稚園に期待すること」

4歳児の保護者には特に子どもの成長が見えにくくなる時期を迎えることから、子ども同士の間関係や遊びの様子から保護者が不安を抱きそうな時期、事柄をあえて事前に伝えて、保護者の役割としては家庭生活のリズムを整えて園での生活に最善の状態に臨めるように努め、小さなトラブルなどは落ち着いて見守ってほしいことを繰り返し伝えている。しかし保護者の姿には、子どもの成長が進んでいるのか、後退しているのかわかりにくくなる時に逆に保護者自身の成長のイメージにとらわれてしまう傾向がある。保護者がそうなると、子どもは親の期待に応えようと良い子として振舞えるようになっていく面と、そうでない面との両方を葛藤として抱え込んでいき、子どもの困難は複雑化していく。保護者が自身の視野（人間理解）の狭さに気づき、子どものありのままを喜べるようになることも保護者の成長支援のひとつであることがわかる。

(5) 子育てトークの企画・実施

平成18年度3学期に行われた保育参加ウィークの後、保育参加後の懇談会がとても有意義だったので、同様に他の学年の保護者と気軽に子育てをめぐるおしゃべりをする機会があるとよい、という希望が保護者の間から聞かれた。そこで園の方からそのような会をやってみないかと投げかけたところ、数人の4歳児・5歳児の保護者が中心となり会を運営することとなった。平成19年度は6回実施した段階で、保護者同士がこの会をどのような場にしたいかを述べ合ったところ、誰でも何でもしゃべれる雰囲気を中心に、「子育てがうまくいかないのは自分だけ」と思ってしまうことのないよう励ましあえる場で、また少し先に経験した人から経験談を聞けるよう他学年の保護者との交流があることという意見で一致し、そのために一度に集まる人数は10人程度とし、参加者が同じメンバーに固定しないよう色々な人に声をかけることとしている。この活動は保育力が高いと考えられる保護者が中心となって担っていることに注目すると、様々な保護者が集う幼稚園が果たせる役割のひとつとして引き続き検討したい。

以上（1）～（5）の成果を踏まえ、平成20年度に研究の完成を目指したい。

本研究は、鎌倉女子大学学術研究所助成研究「幼稚園における保護者成長支援システムの構築に関する研究—保護者の成長過程を組み入れた教育課程の編成—」の平成19年度中間報告である。

**引用・参考文献：**

- 入江礼子、内藤知美、杉本裕子「乳幼児保育活動における親資質の育成支援」鎌倉女子大学学術研究所所報第5号（2005）
- 友定啓子・山口大学教育学部附属幼稚園著「もう一つの子育て支援 保護者サポートシステム」（フレール館 2004）
- 内藤知美・入江礼子「園内研修のプロセスから（4）—保護者との連携を探る過程と保育者の変容—」日本保育学会第57回大会論文集（2004）